

ペロー「サンドリヨン（シンデレラ）」から

バルザック『ピエレット』へ

私 市 保 彦

フランス語では「シンデレラ」は「サンドリヨン」というので、以下「サンドリヨン」と表記するが、この話は世界的な広域伝承である。

私はペロー童話とバルザックを同時に研究してきたが、近代リアリズム文学の巨匠であるバルザックはペロー童話の読み手でもあって、作中で「青ひげ」、「眠りの森の美女」、「長靴を履いたネコ」、「ロバの皮」、「親指小僧」などに言及している。なかでも「サンドリヨン」にまつわるガラスの靴の解釈は、ひろく物議をかもした。

どういふことかという点、歴史小説の大作『カトリーヌ・ド・メデイシス』のうちの「カルビニストの殉教」（一八四一年、三月二十三日―四月四日）において、バルザックはサンドリヨンが履いているガラスの靴は、毛皮の靴ではないかと、異論を呈したのだ。当時貴族の貴顕がまとう毛皮の装いのうちでもクロテンの毛皮は王族がまとうものであったが、百年も経つうちにそれが忘れられ、有名な「サンドリヨン」が舞踏会に履いていたリスの毛皮（*verre*）製の靴はガラス（*verre*）の靴とやれてしまった。どちらも「ヴェール」という発音なので、すり替わってしまっ

たという解釈を示したのだ。⁽¹⁾さらにフランスの大言語学者のリットレまでこの間違いを肯定したので、たいへん有名になったが、その後この説は否定された。というのは、フランス以外の他の伝承でもガラスの靴になっているのが見出されたり、なかでも決定的なのは口承文学の文体論で画期的な説を唱えたマックス・リュッティーによる口承文学はガラスなどの硬質なもののことさら好むといった説の登場である。こうした説はバルザック死後のことであるから、バルザックは知るよしもないが（この問題の登場については私市も『児童文学翻訳作品総覧』（大空社）および『賢治童話の魔術的地図』において、すでに紹介している⁽²⁾）、一方バルザックはサンドリヨン説話に関心を寄せつづけ、継子の受難というテーマの舞台をフランス帝政復古期に移し、『ピエレット』という長編小説（一八四〇年一月十四日―二十七日に「世紀」誌に連載、単行本はフルヌ版の第五巻のフランス地方生活情景の「独身者たち」に所収）にして展開して見せ、原話とまったく異なる次元の高度なレアリズム小説を書きあげたのである。

『カトリヌ・ド・メディシス』と『ピエレット』の二作の発表年代をみると、前述のように踵を接するように近いことが分かる。つまり『ピエレット』執筆の時期、バルザックは「サンドリヨン」の靴問題にとらわれていたのが分かる。そして「サンドリヨン」のいじめのテーマをヒントにフランスの地方生活の政治と家系の階層の実態を展開して、説話ならぬレアリズム小説を語って見せたにちがいない。なお、こうした解釈による『ピエレット』論は私の知る限り読んだためしはないが、あえてここで展開してみたい。

まず『ピエレット』の冒頭を引用しよう。

一八二七年十月の明け方、およそ十六歳ばかりで、最近の流行語ではプロレタリアと無礼にも呼ばれそうな若者が、プロヴァンの下町（低地）にある狭い広場に立ち止まった。その時刻には、長方形の広場に建ち並ぶさま

さまざまな家々を、人に気取られずに観察できた。プロヴァンに流れる各所の川辺に建てられている水小屋はもう動いていた。繰り返されるその音は山手の家々に木霊し、早朝の快い空気と爽やかな空気と調和して、しんとした静けさをかもし出していた。一里（四キロ）ほど先の大通りをガタガタ走る乗合馬車の音さえも響いてくるほどだった。菩提樹の木陰でへだてられた二列の家々はいずれも新しい建物で、平穏で落ち着いた町民の暮らしぶりを窺^{うかが}わせていた。商店はこの界限には一軒も見られなかった。そのとき、金持ち連中の贅を凝らした馬車門がほんのわずかに開いた！ その門があつたにせよ、それが蝶番をきしませて開かれるのは稀なことであつた。例外は、医師のマルトゥネル氏が自家用カブリオレ（折りたたみ幌つき一頭立て二輪馬車）を出して乗りこまねばならぬときだった。何軒かの表門は葡萄のつるで飾られているかと思うと、他の家の門は二階まで伸びている薔薇の木で飾られ、まばらに植えられた大きな茂みからガラス窓まで薔薇の花の香を運んでくるのだつた。広場の一方の端は下町の大通りにほとんど接している。反対側の端は大通りに並行して通^{スル}りで遮^セぎられ、家々の庭がプロヴァンの谷間に注いでいる二本の川の流れのひとつの川辺に広がっている。

広場でいちばん静かなその端で、先ほどの若い労働者は教えられていた家を見つけ出した。石を積んだ溝の線が走っているので石積みであると分かる白い石造りの正門で、黄色い鉄製の粗末な手すりの薔薇模様に飾られた窓は、灰色の鎧戸で閉められていた。一階と二階が見える正面の上には、スレートに覆われた屋根裏部屋に設けられた三つの天窓があり、そのひとつの切妻の上には新式の風見鶏が回っていた。この今風の風見鶏は、ウサギに銃を向けている獵師の姿になっていた。中門には石造りの三段の階段を上るようになっていた。その門のわきの鉛のパイプの口は、細い溝から流れる排水を吐き出しているので炊事場があることが分かる。反対側の二つの窓は灰色に塗られた鎧戸でぴたりと閉められているが、その真ん中がくり抜かれわずかな明りとりになっていて、

くだんの労務者にどうやら炊事場の窓らしいと思わせた。三段の階段を上ると、それぞれの窓の下に地下貯蔵庫の明り通りの窓が見え、いずれも塗装された鉄板の小さな扉で閉められている。いわばすべてが斬新だった。このリフォームされた豪勢な造りがまわりの家すべての古くさい外観と対照的であるのを観察すれば、そこには引退したとるにたらぬ商人の狭量な思いとたつぷりした満足感があるのを見抜くであろう。若者は悲しみとないまぜになった喜びの表情を浮かべて、屋敷の細部を眺めた。彼の視線は、じっくり考えながらといった動きでもって炊事場から屋根裏部屋まで見渡していた。薔薇色の陽光が、屋根裏部屋の窓のひとつに掛けられたキャラコのカートンを射た。すると若者の表情はぱっと晴れやかになった。彼は数歩下がって菩提樹の木にもたれかけ、数々の魅惑的なメロディーを贈ってくれたブリュゲール（一七九三年にニームで生まれた歌謡作家、以下に引用される歌はブルターニュの古謡に由来するもので、ネルヴァルも同種らしき歌謡を「ヴァロワ地方の歌謡と伝説」で紹介している）が発表したあのブルターニュ地方の恋歌を、西部の人々に特有の伸ばした調子で歌いはじめた。ブルターニュでは、婚礼の日に村の若者たちが集まって新婚夫婦のためにこれを歌うのだ。

私たちはお祝いに参りました、

あなたのお婿さんのために

花嫁さまのためにも。

花嫁さまは結ばれました、

金の糸でもって

死ぬまで解けない金の糸で。

.....

.....

「この花束をお受けください」という歌詞になると、若い娘の顔が現れた。白い手が用心深く窓を開き、

ああ！ この花束が萎んでしまうように、

あなたのむなしい思いは消えてゆく

という二行のくだりの簡単な句で終えると、若い娘が若者に頭でうなずいて挨拶をした。

職人は突然、上着の下から一輪の黄金色の花を取り出して、顔を見せた。ブリ地方では珍しいがブルターニュの野原ではよく見られるハリエニシダの花である。

「ではあなたなの、ブリゴー？」と若い娘が小声でいった。

「そうだよ、ピエレット。僕はパリにいるんだが、フランス中をまわっているところだ。でも、結局はここに落ち着こうと思う。君がいるからね^⑥」

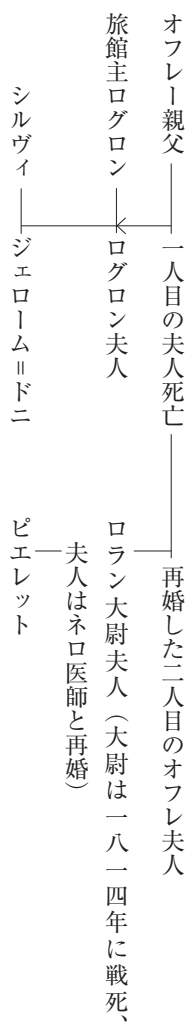
そのとき、ピエレットの部屋の下の二階の部屋の両開きの窓がガタピシと音を立てた。ブルターニュ生まれのこの娘は、世にも恐ろしい面持ちで、『逃げて！』とブリゴーに伝えた。

(中略)

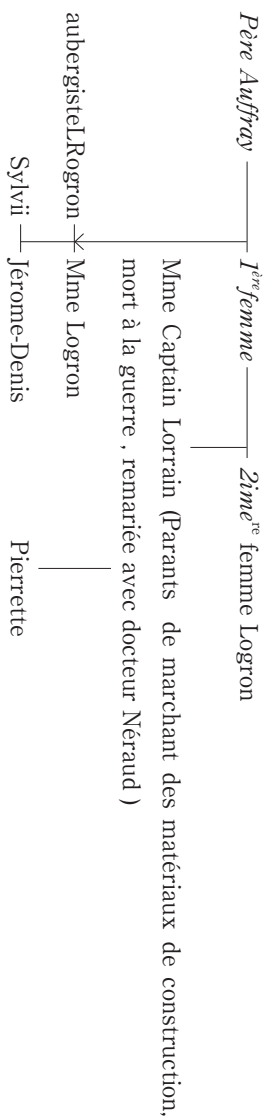
窓から顔をのぞかせたのは、老婆だった。上着を着た吟遊詩人の歌を聞こうと、朝方の心地よい眠りから跳ね起きる人などいないものだ。愛の歌で目覚めるものは娘だけだ。老婆は、逃げてゆくブリゴーの足音がかすかに響いてくる方角をくまなく見渡した。朝方に醜い老婆が窓から顔を見せる光景ほど恐ろしいものはないであろう。小さな町を通り過ぎるときに旅人の興味を誘う異様な光景のうちで、窓から顔を見せる醜い老婆の出現ほどに、ぞっとするものがあるだろうか？ 胸くその悪いものがあるだろうか？ 笑いとばすにはあまりにも陰気で、あまりにもぞっとする。とても耳ざといこの老嬢は、美しく見せるためのあらゆる手立てをかなぐり捨てていた。かもじもレースの飾り襟もつけまわしていなかった。老婆が後頭部を被う黒いタフタの見苦しい小さな袋をつけていたが、それが寝ている間に動いてナイトキャップからはみだし、この寝乱れ姿は老婆の顔を画家が魔女を描くときのあの恐ろしい様な様子⁶⁾をしていた。(『ピエレット』)

こうして、物語の主人公が登場した。やがて、この老婆と若い娘はじつは縁続きであることが分かってくる。そして、ふたりのこの関係からこの物語がじつは「サンドリヨン」譚を骨子にしていることが分かるので、ここできわめて複雑な二人の姻戚関係を説明しよう。

ふたりはオフレー親父という血縁の祖父をもっているが、その関係は複雑であるから、図示してみよう。



「フランス語表記」

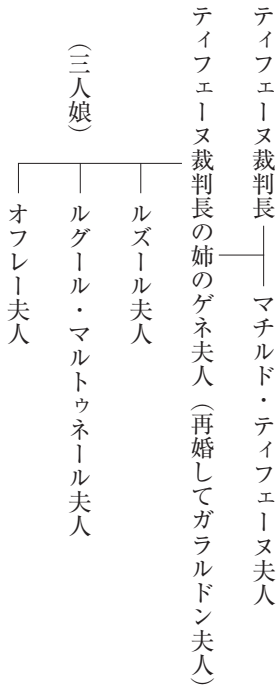


一方ペローの「サンドリヨン」では二度目の妻、つまりサンドリヨンの継母が二人の連れっ子とともに乗りこんでくるのである。しかし、有名なグリムの再話をふくめ、「シンデレラ伝承」は古くはギリシアの歴史家ストラボンが書き残した美しい女奴隷ロドビスの物語があるくらいで、伝承としては古くから世界中に伝えられているが、バルザックの場合はガラスの靴への疑問にあるようにペロー版の物語を念頭にしているのはまちがいないである

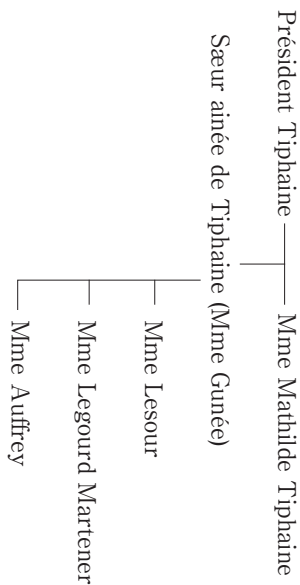
う。

しかもバルザックは、少女いじめのテーマから次第にフランスの地方に特徴的な上下関係のある家柄の葛藤と、それにもなつて七月革命の前夜の右派と左派の対立のテーマに移行してゆく。とりわけ家柄の問題は主要テーマとなる。それぞれの一族が枝から枝へと分かれ、それぞれが野心を抱き対立してゆくさまを、バルザックは細にいき微にわたつて描き出す。こうして、バルザックの頭脳からはとめどもなく家系の網が描かれてゆく。ここにこそバルザックのバルザックたる所以があるのだと思わざるを得ない。

ここで、やがてロゲロン姉弟と対立するプロヴァンの町を牛耳る別の有力な家系にも触れねばならない。町のティフェーヌ裁判所長とその妻のティフェーヌ夫人である。この家系もじつに複雑であるが、その一端を以下に示してみる。



「フランス語表記」



さて、やがて中央のバリ裁判長の地位を狙っているプロヴァン裁判長ティフェーンヌを夫に持つマチルドは、「プロヴァンの女王」と謳われるようになって勢力を誇っているが、ログロン姉弟は、この一派に対抗しようと財力に任せて立派な家を建築して町の有力者たちを集めようとするが、それに見事に失敗する。そこに一通の手紙が舞い込んで、両親を亡くし、孤児同然になっているお宅の義理の姪っ子に当たるピエレットを引き取ってくれぬかという祖父母からの手紙が舞い込んだのだ。なおピエレットはとても可愛い娘だが、オッフレ親父の第一夫人の孫娘は恐ろしく醜い娘であったことを、ここで付け加えねばなるまい。しかしピエレットに相続する財産もついていることから、ログロン姉弟は欲得がらみで引き取ることになる。ところが、シルビーはやがて病弱のピエレットをこき使い、いじめ抜くということになるのだ。

そこに心配してやってきたのが幼なじみで、ピエレットと思い合っているブリゴーである。その出会いの場面で、

前述のように従姉に虐められているピエレットはシルヴィーに見つからないように逃げてと声をかける。

物語はその場面から始まっているが、その経緯を説明しながら、バルザックはその背後にあるプロヴァンの家系とその対立と葛藤を次から次へと繰り出すように語る。読者はこうした作者の頭脳と想像力に驚嘆する。私は、二百数十人にもものぼる『人間喜劇』の再登場の人物はこうして生まれたに相違ないと思わざるをえなかった。しかも、固有名詞の命名にバルザックがこだわっているのは有名である。

例えば『Z・マルカス』という短編で彼の名前が紆余曲折の末に悲運に終わる主人公の運命を表していると説明しているが、⁽³⁾『ピエレット』ではピエレットに辛く当たる姉弟の名前を Rogron (ログロン) 姉弟としている。プレイヤード版で綿密な解説をつけているトリッテール (Triter) は、⁽⁴⁾こゝには grognier (豚などが鳴く、ぶつぶつ不平をいう) という動詞の意味があるという。とりわけ Rogron 姉弟は富裕層で王党派の「女王」のマチルダ・ティフェーヌを羨望し、その座を奪おうとしたり、ピエレットをいじめ抜くのだが、まさに「名は体を表す」であろう。一方プロヴァンの「女王」と目される Mathilde Tiphaine はいかにも堂々たる感じであるが、残念ながらその語感是我々日本人にはわからない。

それよりピエレットはどうかというと、男性形の pierre (石) はよくある名前であるが、何よりも十二使徒のひとつとしてよく知られているペテロのフランス名であるという連想が働くはずである。ペテロはアツビア街道でキリストと出会い、「どこに行かれるんですか?」と問うと、あなたがローマから逃れるなら、わたしがもう一度ゆく」といわれて、みずからもローマに戻って、逆さ磔に処せられたという伝承が残っている。つまりペテロは残酷な刑を受けた殉教者であり、ローマのサン・ピエトロ大聖堂にその名を残している。Pierette は pur、つまり(清らか)という単語も内蔵しているが、やはり聖ペテロを連想する名前であろう。その理由は彼女の受難の筋書きを

たどれば分かる。

いずれにせよ、これから夥しい人間が登場し、プロヴァンで王党派と自由派に分かれ、いずれもピエレットに辛く当たるのだが、ピエレットを救おうとして、庇い抜くのは幼友達のブリゴーのみとなる。こうして、シンデレラモチーフはフランスの地方都市の政治状況のドラマとなってゆくのだ。その際にバルザックが繰り出す家系はバルザックの想像力がいかなるものであるか、その理由が見えるような物語である。バルザックの脳は次々に家名と人名を繰り出すと、読者はそれにやつとのこと追ってゆく始末になる。

とはいえ、前述のトリッターの解説では「サンドリヨン」の「サ」の字も出てこない。あるいは、フランス人にとってはあまりに自明のことだからであろうか。

しかし執筆時には、バルザックが「サンドリヨン」を深読みし、サンドリヨンの靴は「ガラスの靴 (verre)」ではなく「リスの毛皮 (vair)」の靴」であると熱っぽく、鼻高々と語っているではないか。それを無視してよいだろうか。私には、フランスの研究者たちが「サンドリヨン」が物語の「元型」のひとつであることを無視して論じているとは思えない。あるいは、この濃密な物語の元が「サンドリヨン」の短い語りと結びつけるのはタブーなのだろうか？ いかに「ピエレット」は地方の階級問題と政治問題を描いた傑作であるのに違いない。しかし多くの物語には「元型」がある。そしてバルザックほどそれに敏感な作家はいないと言えよう。例えば、『ゴリオ爺さん』の「元型」はシェイクスピアの『リヤ王』である。私は、物語の「元型」による伝播というテーマにも関心があるので、その問題からも物語を解析してみたい。

ではバルザックが主張している「ガラスの靴」問題は、『ピエレット』でどう処理されているであろうか。それには、バルザックもピエレットを晴れがましい宴会の場面を設定して別の形で再現しようとしている。それに焦点

をあててみよう。しかし、その場面に戻るまえに、前述したようなプロヴァンの二派の対立劇をバルザックは詳述しているので、その大略をまとめておこう。

シルヴィとジェローム・ドゥニの姉弟は、自分らを排斥する王朝派のマチルド・ティフェーヌ一派と敵対するようになり、そこにヴィネなる人物がリベラル派の雑誌を創刊、それに対してシルヴィの弟が資金を出す一方、雑誌刊行の責任者たるグロー大佐なる人物が財産を狙って結婚まで視野に入れてシルヴィに巧みに近づくと・シルヴィもその気になってしまう。弟の方も、ヴィネがグロ家に引き入れたアペール神父の妹の娘の美女シャルル・ブフに目をつけることになる。この神父は、ピエレットに説教するためにヴィネの口利きでログロン家に入入りするようになったのだが、弟がシャルル・ブフ嬢に関心をもつようになる。すると、紹介者のヴィネがリベラル派であることからマチルド・ティフェーヌ一派は警戒し慌てる始末となる。さらにヴィネは、大佐にはピエレットと結婚したらどうかと焚きつける始末である。

ブリゴーがピエレットと再会したのは、こうした政治的抗争と男女関係のからみの只中だったのだ。しかも、ピエレットが窓越しに顔を合わせたのはグロー大佐に違いないとシルヴィがとんでもない曲解をする。ここで、いかなるドラマが起るかは想像するに難くないであろう。

バルザックのドラマツルギーは、物語の主人公のピエレットといじめ役のシルヴィ、それにピエレットの恋人役のブリゴーの出会いの場面を筋書きの焦点にして、そこから放射状にプロヴァンの家系図と自由派と王党派に分裂している政治状況を描くという方法をとっていて、物語はたえずこの場面にもどる。

なお、前述のプレイヤード版の解説者トリッテールは、ブリゴーとピエレットの関係には前年に刊行されたスタンダールの傑作『バルムの僧院』でのファブリスとクレリアの関係の影響があると解説しているが、確かにバルザッ

クは『ピエレット』刊行の寸前の一九四〇年九月二十五日に「パリ評論」誌上で「同作品を激賞する論考を書いているが、牢獄に閉じ込められているファブリスと彼の脱獄を画策するクレリアの関係は状況が全く違うのではないか？

さて、出会いの場面に戻って、ピエレットとシルヴィの間にかかるトラブルが起きるだろうか？ そのまえに、シルヴィがピエレットを女中のように酷使するようになっていた状況を描いたのちに、シルヴィがピエレットに男が歌を歌ってもらっていたのではないかと追求する会話が描かれる。

「お姫さま以上でも以下でもない風情のお前は、今朝セレナードを歌ってもらっていたじゃないか」

「セレナードですって？」ピエレットは今聞いたことばを繰り返して、叫んだ。

「セレナードですってだと。つまり、お前にはいい人がいるということだよ」とシルヴィは、ピエレットの答えを繰り返して応じた。

「お姉さま、いい人って何のこと？」

シルヴィはそれに答えるのを避けて、いった。

「いつてしまいなさいな。家の部屋の窓辺に結婚したいとかいって、男が話しにやってきましたとね！」

いつも奴隷扱いにされていたので、奴隷に必要な知恵を働かせてピエレットは大胆にも、「何をおっしゃっているのか、さっぱりわかりません」と答えた。⁶（『ピエレット』）

ピエレットはブリゴアの来訪を明かすまいとし、シルヴィは男はグロー大佐にちがいないと疑いながらの対話で

あると読者にはこれまでの筋書きでわかってきて、これからどういうことになるやらとピエレットの身の上を心配してやまないところに、さらなる災難が起こる。というのは、ピエレットとブリゴーが手紙を交換するようになると、それをシルヴィが見破るのだ。しかも、シルヴィはあくまでも手紙交換の相手はグロー大佐であると思いこんでいるから始末に追えない。そういうわけで、それを皆が集る晴れがましい席で看破しようと一計を考えつく。これがサンドリヨンでの舞踏会に対応する場面であると思われるよう。

ただ、「ガラスの靴」にまつわる事件やそれを想起させるような事件は、「ガラスの靴」の存在を否定したバルザックにとつては、論考の初めに紹介したように禁忌である。そこで、以下のような場面を考え出す。

シルヴィはまずピエレットにひだ飾りのあるドレスを着せ、同席した美女のシャルルブ嬢をも嫉妬するような綺麗な衣装をつけさせて、グロー家の宴会に臨ませ、ピエレットをいかにも大事に扱っているふりをした。(「シンデレラ」の妖精がにくまれ役のシルヴィになっている)

宴会がたけなわになると、賭けトランプの「ボストン」が始まった。席にはリベラル派のクールナン夫妻 (Mme Courant)、リベラル派のネロー医師、ティフェュヌ派からリベラル派に鞍がえしプロヴァンの予備判事デ月革命後にプロヴァン裁判所長に任命されるまでは予備判事のデフォンドリーユ (Desfondrilles)、女性陣ではシャルルブ嬢がひととき華やかだった。一方シルヴィと大佐の間に座らせられたピエレットは、大佐と組んだが手を出さないで、刺繍をしながらカードに目を配っていたが、ハートがくると、大佐に「それにしたら」と助言した。

大佐がハートが揃った組札を取り出すと、大佐とピエレットの間に置かれた。シルヴィには五枚の弱いカードだけが残された。

「フェアじゃないわ、ピエレットは私の手札を覗いて、大佐に教えたんだわ」

「でもね」とセレストがいった。「今はあなたがハートを持つてらっしゃるのだからこの方が続けるのは当然じゃありませんか！」

このことばで、フォンドリーユはにつこり微笑した。彼は、プロヴァインでのどんなゲームでも楽しんでいて、ピカデーの『富籤館』のリゴードン（一八一七年に上演されたピカールとラデイ作の芝居でリゴードンという人物はすべてを混ぜ返し、茶化す人間として登場）といった手合だった。

「大佐の手ですな」とクールナンは、何が問題かわからずにいった。

シルヴィは、老嬢が老嬢に対してかける残酷でもあり優しくもある眼差しを投げかけた。

「ピエレット、あんた私の手を見たんでしょう」とシルヴィは、従妹を睨みつけていった。

「いいえ、お姉さま」

「私はすべてを見ておりますよ」と考古学好きの判事が口を出した。「この子は大佐のことしか見ていませんでしたよ」

「なーに！」不安になったグローが口をはさんだ。「若い娘というのは、なにげなく目をやる必要がありますからね」

「あー」シルヴィは嘆息をした。

「そうですとも」グローは繰り返した「悪戯で覗いたのかも知れんな。そうじゃないかい、お嬢さん？」

「ちがいます」（『ピエレット』）

しかしシルヴィは頑として、札を見て大佐に知らせたにちがいないと言いつ張る。ピエレットは、何を言ってもシルヴィは信じてくれないだろうと思ひ席を立つと、シルヴィは激怒して、「負けた分は払ってもらうからね」というではないか。一方、疑われて心穏やかならぬピエレットは席から立つて、判事が開けつばなしにしていた廊下のドアに額をぶつけたときに、「頭と耳のあたりの手巻き紙で巻くために分ける箇所を、開けつばなしのドアにいやつというほど衝突して、ひどい青あざになってしまった」のだ。⁽⁸⁾

これが宴会の「ホイスト」のゲームのときの事件から、起こった事件である。「サンドリヨン」での舞踏会でガラスの靴を落としてしまったことから始まる事件とはまったくちがうことはいうまでもない。サンドリヨンのガラス（verre）の靴はじつはリスの毛皮（vair）の靴であると堂々と論じたバルザックは、物語のこの部分をどう書き直すか考えたに違いない。それが、高々ドアに額をぶつけたぐらいの事件にしたのはどうであろうかと疑問に思うふしもあるが、じつはピエレットが思春期特有の「萎黄病」という貧血症にかかっていて密かに苦しんでいたということが背景にあり、物語の最後でピエレットが死亡する悲劇が起こったとき、ドアとの衝突が原因であろうか、「萎黄病」が原因であろうか、シルヴィの虐待が原因であろうかと裁判沙汰になり、ここでもリベラル派と王党派の対立がからんでブリゴーたちの分が悪くなるのだ。パリから「人間喜劇」でおなじみの医師のビアンションが呼び出されたり、ピエレットの祖母が駆けつけたり、町でも大騒ぎになる裁判ではブリゴーたちの訴訟は成立せず、リベラル派は凱歌を揚げる。

そうこうしているうちに、四回にわたる手術のあと、ピエレットは病床でついに息絶えた。

この小さな天使が苦しむのを止めたのは「復活祭」の火曜日の快晴の日の三時であった。ブリゴーによって呼

び出されている彼女の健気な祖母は夜通し司祭たちと見守り、こわばった手で遺体に経帷子きふかたびらを着せこんでいた。夕刻、ブリゴーはオフレー家を離れ、フラピエ親方の家にやってきた。

（中略）

ピエレットの遺体の寝台の前に、祖母のロラン老夫人が髪を振り乱して、叫んでいた。

「いや、そんなことはさせませんぞ」

寝台の足元には、オフレー氏、ペルー司祭とハバール氏が立っていた。ローソクがまだ燃えていた。⁽⁸⁾（『ピエレット』）

遺体にさらにメスを入れようとしているので、立会人たちが集まっていたのだ。それがログロン一派と見るや、「そんなことをさせるものか」とばかり、ブリゴーは商売道具の鑿のみをふりかざした。すると、この処置は虐待死を招いたと告訴されているログロン側が脳の腫瘍が原因であることを証明するためのものと司祭が釈明する一方、ログロン側は「執行妨害だ」と言い放って引き上げた。

結局裁判はヴィネが策を弄して「控訴棄却」に持ちこんで終わったが、じつはこの経過の法律的説明は、パリ大で法律を学び法律事務所でも実務にかかわっていたバルザック得意のものだった。物語はこうしてピエレットの死後は裁判の場面となり、リベラル派の勝利となって終わる。中央の政界ではルイ・フィリップ王制が倒され、プロヴァンのリベラル派の面々はいずれも浮かび上がりそれなりに出世する。根底に流れていたシンデレラのモチーフは、こうして地方の政治劇を活写するためのものであったことが、明らかになる。バルザックがそのためにシンデレラモチーフを底流にして地方の政治的な葛藤をより鮮烈に描くことができたということは、否定できないであろう。

なお、ピエレットの納棺の場面で、棺に裏打ちをする四枚の鉛板の値が、ピエレットが故郷のナントからプロヴァンに旅するときにブリゴーが与えた費用と同額だったことに衝撃を受けたとバルザックはことさら語っている。この逸話には、ピエレットが虐待の時期からやっと解放され、ブリゴーと過ごした幼児の黄金時代に還りつくのだというバルザックの思いが込められているよう。バルザックは哀惜をもってシンデレラモチーフを描いているのだ。

【注】

- (1) Balzac, *Sur Catherine de Médicis*, Balzac, *La Comédie Humaine* XI, pp. 206 ~ 207, Bibliothèque de la Pléiade, Edition Gallimard, 1980.
- (2) 「風の又三郎」とガラスの靴幻想」、『賢治童話の魔術的地図』、新曜社、二〇二二年、一五八―一六一頁
- (3) Balzac, *Pierette*, *La Comédie Humaine* V I, pp. 28 ~ 33, Bibliothèque de la Pléiade, Edition Gallimard, 1976.
- (4) Balzac, *Z Marcas*, pp. 28 ~ 32, *La Comédie Humaine* V III, Bibliothèque de la Pléiade, Edition Gallimard, 1976.
- (5) Jean-Louis Titter, op. cit. *Introduction*, p. 18.
- (6) Balzac, *Pierette*, op. cit. p. 108.
- (7) Balzac, *Pierette*, op. cit. p. 123 ~ 124.
- (8) Balzac, *Pierette*, op. cit. p. 158 ~ 159.